

別記様式第6

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

| | | | |
|---|--------------------|------------------------|------|
| 博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.) | 博士 (文学) Ph.D. | 氏名 (Candidate Name) | 藤田 衛 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | | |
| 論文題目 (Title of Dissertation) 『易緯』の総合的研究 | | | |
| 論文審査担当者 (The Dissertation Committee) | | | |
| 主 査 (Name of the Committee Chair) | 教授 有馬 卓也 | | |
| 審査委員 (Name of the Committee Member) | 教授 末永 高康 | | |
| 審査委員 (Name of the Committee Member) | 教授 後藤 弘志 | | |
| 審査委員 (Name of the Committee Member) | 京都大学・教授 武田 時昌 | | |
| 〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation) | | | |
| <p>本論文は、従来取り扱いの困難さを伴うが故に、概略的な理解、或は補助資料としての役割しか担われなかつた緯書を、緯書の中で唯一通行本が伝存する『易緯』を中心に真正面から考察の対象とし、『易緯』の種々の象数理論を構造的に把握し、漢代象数易との関連性を探ることによって、『易緯』の全体像とその思想的背景を明確にしようとする意欲作である。</p> <p>本論文は、序論と第一篇「緯書の定義と成立」(全二章)、第二篇「『易緯』の文献学的研究」(全三章)、第三篇「『易緯』の思想的研究」(全七章)、終章から構成され、巻末に附録が付されている。</p> <p>第一篇では未だ確固たる定説を見ない緯書の定義と成立について考証し、多くの先行研究を提示しつつ、その最も安定的な解釈を提示し、本研究全体に及ぶ基礎を構築する。即ち緯書とは、孔子の作とされ、『河図』9篇、『洛書』6篇、『河図』『洛書』を演繹した書30篇、七経緯36篇の計81篇から構成されたものであり、それは前漢末から王莽の新王朝初期頃、今文学派の手によって段階的に成立したものであるとする。</p> <p>続く第二篇では、緯書の中で唯一まとまった形で伝存している八種類の『易緯』の来歴に言及し、中でも最もまとまった形で残っている『易緯乾鑿度』上下二巻に附された鄭玄注の真偽を検討する。と同時に、全八種類の真偽問題を一つ一つ明らかにし、緯書成立時における『易緯』の思想内容を研究するためのテキストの処理の仕方を提示する。</p> <p>そして、第一篇・第二篇で提示した緯書の定義、『易緯』テキストの処理方法に基づいて、第三篇では、その具体的な思想内容に論を進めていく。ここでは前漢末の易学に見られる「爻辰説」「世軌説」「推厄所遭法」「推帝王即位法」「推即位之術」「卦気説」「八卦卦気説」等の易術が、『易緯』のそれと比してどのような異同があり、どのような関係を有するかを一つ一つ丁寧に明らかにし、『易緯』の思想的特質を論じ、前漢末期から後漢期に至る易学の一端を、前漢末の京房易とのかかわりの中で解明する。また、その易術の日本における実例についても言及する。</p> <p>最後に終章において、今後の課題を提示する。</p> <p>さらに附録において、改めて『易緯』輯補を行い、これまで見落とされていた『易緯』の佚文を補訂する。</p> <p>本論文は、難解であるが故に部分的にしか論及されていなかった『易緯』の初のまとまった研究と言ってよく、包括的な立場から理論構造の解明に挑んだ斬新なものである。当時の政治状況や學術思想との対照研究、及び象数易の中世・近世的展開との関連において課題は残されているものの、漢代思想史研究に新たな地平を切り拓き、今後の研究に裨益する所は大きい。その成果は高く評価できる。</p> <p>以上、審査の結果、本論文の著者は博士(文学)の学位を受ける十分な資格があるものと認める。</p> | | | |

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)